

**巻頭言**

## 公共契約の片務性解消を目指して

荒 牧 英 城



2008年1月のNHK人気番組「プロフェッショナル-仕事の流儀」で、中東のプラント建設現場で活躍する高橋直夫所長が紹介された。様々なトラブルを解決しながら限られた工期を守るために奮闘する仕事の流儀により、海外の発注者の信頼を勝ち取っていく事例であるが、これは私たちの身近な建築・土木の建設現場で活躍する人達の姿と重なる。2000年に私が出席したロンドンでの公共契約に関する会議で、シンガポール政府の役人（建築家）から、日本企業の工期遵守、工事の安全性に対する姿勢を高く評価する声を聞いたことがある。現場の安全対策、工期の遵守を含む建設工事の品質の高さは、何も自動車やデジカメの専売特許ではなく、日本人の特徴といえる仕事に対する誠実さとプロフェッショナル魂の表れである。

しかし、この日本企業のアドバンテージが、「知る人ぞ知る」だけでは、世界のマーケットはなかなか広がらない。世界のインフラ市場では、自国よりも外国のマーケットを中心に活動する強力な欧米企業に加えて、最近ではインドや中国など新興国の企業が台頭しており、競争は厳しい。さらに、近年の公共契約ではPPPなど新しい契約手法が多用され、計画、建設、維持・修繕、管理・運用など幅広い知見と経験が求められる案件が多くなっている。このため欧米諸国、新興国を問わず、国を挙げて自国企業の海外展開を支援する姿勢が際だっている。英国でPFIを多用する理由の一つとして、「自国の建設産業が海外のマーケットで競争相手に太刀打ちできるよう国内で経験を積む機会を与えること」を挙げている。

ひるがえって、日本の建設産業行政において、「自国企業の海外展開への支援」という発想はほとんど感じることができない。現在、ODAのスキームの一つである無償資金協力の契約の片務性が問題になっている。予想を超える物価上昇、用地取得や治安の悪化に

よる工期の遅れなど、国内では発注者責任と考えられるものが、全て請負者がリスクを負担している。国際的なルールからいっても理不尽と思われるこの片務性は、無償資金協力が日本企業だけが受注するタイトのODAであり、国際競争にさらされることがなかったため、問題の顕在化が遅れたと言えなくもない。問題は、ODAだけではない。いま話題の「道路の中期計画」では、今までにも増して道路構造物の修繕・改修の重要性が認識され、予算的にも大きなウェイトを占めるに至っている。しかるに、これらの工事は、構造物の老朽・損傷度、工法、地元・交通条件などが複雑で、新設工事以上に高度なマネージメント・技術力が求められるのに拘わらず、価格面で正当な評価がされていないため、民間企業は進んでこれらの業務に取り組む意欲が出ない。業務の内容を正しく評価し、正当な利益が出るような受発注体制を整えないと、今後内外で拡大するであろう業務分野の技術力を磨くことができなくなることを危惧する。

「日本の公共工事やODAは高すぎる」とする世論の大合唱のもと、一般競争入札の導入による「異常な低価格による入札」や、片務的な請負者側のリスク負担のため「契約の不調」が相次ぐことになり、インフラの質の確保が困難となる。「プロフェッショナル」で紹介されたプラント現場の契約がどうなっているのか定かではないが、高橋所長のやる気に満ちた姿から推察すると、少なくとも「努力すれば報われる」世界であるに違いない。国内外の公共工事の現場においても「やる気がおきる」、「若手が育つ」生き活きとした現場であってほしいし、そのためには工事に関わる全ての当事者に「WIN WIN」の関係が成り立つような制度設計がぜひ必要である。